

# 国文学研究資料館蔵田安德川家旧蔵入木道伝書における定家様

福 原 真 子

## 要 旨

国文学研究資料館には、八五〇点・四一八〇冊の田安德川家資料が寄託されている。うち「田藩文庫」と称される一千点あまりの田安德川家旧蔵古典籍は、家祖・宗武（一七一五―一七七二）から、二代・治察（一七五三―一七七四）、三代・斉匡（一七七九―一八四八）にかけて蒐集された江戸期における貴重な資料である。

なかでも入木道伝書は、質量ともに国内有数のコレクションであると言われ、二百点近くにも及ぶ。その大半を占める世尊寺流伝書と持明院流伝書は、能書の家である世尊寺家・持明院家に伝来したとされる入木道伝書である。内容は様々であるが、書式や心得などを記した理論書と、色紙形や散らし書きなどを視覚的に示した雛形に二分される。

本稿では、収蔵される入木道伝書から、定家様に関する資料を取り上げた。その結果、定家様に関する記載がある理論書は五点（入木道基本資料二点、持明院流伝書一点、その他伝書二点）、定家様の字形で記された雛形は六点（世尊寺流伝書一点、持明院流伝書四点、その他伝書一点）であった。以上一一点の書誌及び内容についての考察とする。

田藩文庫における定家様関連の資料を網羅的に調査した結果、定家様は和歌との強い結びつきにより享受されていたことがわかる。しかしながら、書法の習得は一般的なことではなく、和歌享受者にとって自ら用いるという意識は概ね希薄であったと考えられる。



## はじめに

国文学研究資料館には、田安宗武著作類、田安家日誌、日記・記録、有職故実、文学、音楽、武術、書道関係の書物など、八五〇点・四一八〇冊の田安德川家資料が寄託されている。うち「田藩文庫」と称される一千点あまりの田安德川家旧蔵古典籍は、徳川吉宗（一六八四―一七五二）二男である家祖・宗武（一七二五―一七七二）から、二代・治察（一七五三―一七七四）、三代・斉匡（一七七九―一八四八）にかけて蒐集された近世期における貴重な資料である。

なかでも入木道伝書の蒐集は、質量ともに国内有数のコレクションであると言われ、二〇〇点近くにも及ぶ。鈴木淳「田藩文庫考」<sup>〔1〕</sup>によれば、大きく四種に大別され、入木道基本資料七点、世尊寺流伝書五〇点、持明院流伝書一〇七点、その他伝書三二点となる。その大半を占める世尊寺流伝書と持明院流伝書は、能書の家である世尊寺家・持明院家に伝来したとされる。これらの多くは、三代・斉匡の時代に、伊予松山藩主・松平定国（一七五七―一八〇四）を介してもたらされた。内容は様々であるが、書式や心得などを記した理論書と、色紙形や散らし書きの雛形など視覚的に示されたもの（本稿では、以下「雛形」と称する）に二分される<sup>〔2〕</sup>。

本稿では、田藩文庫として収蔵される約二〇〇点の入木道伝書から、定家様に関する資料を取り上げた。その結果、定家様に関する記載がある理論書は五点（入木道基本資料二点、持明院流伝書一点、その他伝書二点）、定家様の字形で記された雛形は六点（世尊寺流伝書一点、持明院流伝書四点、その他伝書一点）であった。以上二点を順に①から⑥で示し、書誌及び内容についての考察とする。そして、田藩文庫の入木道書コレクションにおける定家様に関連した資料を網羅的に調査することによって、入木道における定家様の捉え方を考えてみたい。

## 一、定家様に関する記載がある資料

### ①『定家卿筆諫口訣』（一五―七七三―）

〔江戸後期〕写 一冊

袋綴。国文学研究資料館「国書データベース」(<https://doi.org/10.20730/200023342>) にて公開。薄墨色水玉文様表紙（縦二六・八×横一九・〇cm）。左肩打付書「定家卿筆諫口訣 式部之内」、題箋形罫線内題「定家卿筆諫口訣」。本文料紙、薄様。墨付九丁、後遊紙一丁。每半葉五行。用字、漢字・平仮名。朱書・書入れ有。印記「田安府芸臺印」、「献英樓圖書記」。奥書・識語は巻尾に「右京極中納言入道筆諫之口訣 直彼卿之請口傳記之畢 藤原為相在判」の記載有。

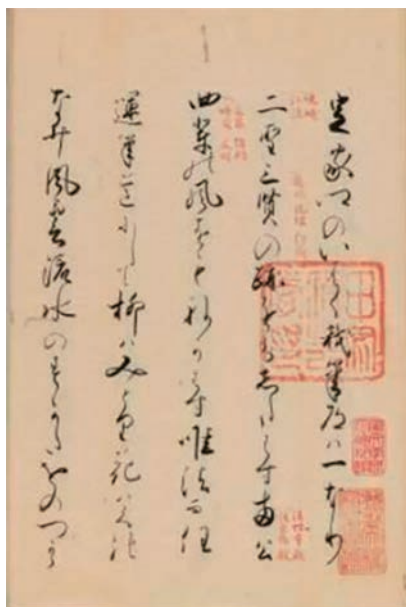
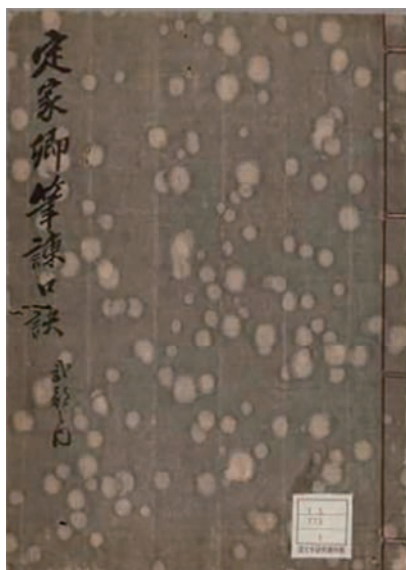
田藩文庫では入木道基本資料として、『定家卿筆諫口訣』と称される伝本が二点所蔵される。本書は、そのうちの一点である。二点の蒐集経緯は異なり、本書の蒐集経緯については後述③としたい。また、田藩文庫には七点の入木道基本資料が所蔵されるが、うち二点を占めていることも留意すべきかと思われる。

本書は『定家卿筆道』『定家卿筆諫口訣』などと称される一連の伝本であり、近世期には写本が繰り返し行われている。内容は、定家様を記すための書法について述べられる。序文と一一項目から成り、挿図が付される。一一項目の内容は大きく三つに分けられ、筆の使い方・点画の書き方・文字構成の仕方が記されている。記載内容の詳細については、拙稿「『定家卿筆道』の著述内容とその意義」<sup>③</sup>を参照されたい。

②『定家卿筆諫口訣』（一五―七七三―二）

袋綴。国文学研究資料館「国書データベース」(<https://doi.org/10.20730/200023343>)にて公開。薄墨色水玉文様表紙

（縦二二・六×横一八・九cm）。左肩打付書「定家卿筆諫口訣 式部之内 保考書」、内題「定家卿筆諫口訣」。本文料紙、薄様。岡本保考写。墨付九丁。每半葉六行。用字、漢字・平仮名・片仮名。朱書・書入れ有。印記「田安府芸臺印」、「猷英樓圖書記」。奥書・識語は巻尾に以下の記載あり。



〔江戸後期〕写 一冊

右京極中納言入道筆諫之口訣直彼卿之

請口傳記之畢

藤原為相在判

是迄者持明院基敦朝臣書藏也

飛鳥井雅庸卿此記送

定家卿語ニ云凡筆道至極書内ニ皮肉骨

三体ヲアラハシ侍ルニ文略

野跡ハ骨 佐理ハ皮 權跡ハ肉

此三体ハ先骨ヲ以テ（道風ノ事ナリ）本体トスベキニヤ何是レニヤ

サシク愛アリトモツヨキ方ノナカランニハイミシカリトソ

覺ル人ノ身体ニモ骨コソ真ノ五体ヲタモチ其中

コニテハ侍レ中略此三人筆ニ長セリトイヘトモ右一体計

ニテ三体ヲ束テ書事ナカリキ爰ニ高大師

ノ御筆ヲ一ニ桴ヲ擬ヘルトハ申侍シ哥モ亦如此也

一摂政（後京極）モ歌ニハ柿本詩ニハ大原ト常被仰侍キ

高野大師ノ御筆ハ楽天人丸ノ作ノ如ク和漢

ノ筆ニ准ベ唐様ニモ日本橋ニモ亦上代下世ニワ

タリテアソハサレタリトミユサレハ嵯峨天皇モ唯

筆ニハ大師ト勅定アリキトソ傳承ル誠ニナラヒ

ナキ事トそ覚へ侍る

先達定家ノ筆書弥後人ノ偽作ト被遊候如此大師

道風ヲホメラレタレ證文コレアルウヘハ無疑事ニ候

右傳書ノ中ヨリ見出候故要文ヲ写御めかけ申也

保考

京極の君の口訣ある人の

もたるをかりてうつしたり

ひめおくへきよし傳へければ

みたりに人にみすへから

すこゝまこの末／＼もこれ

をまもるへし

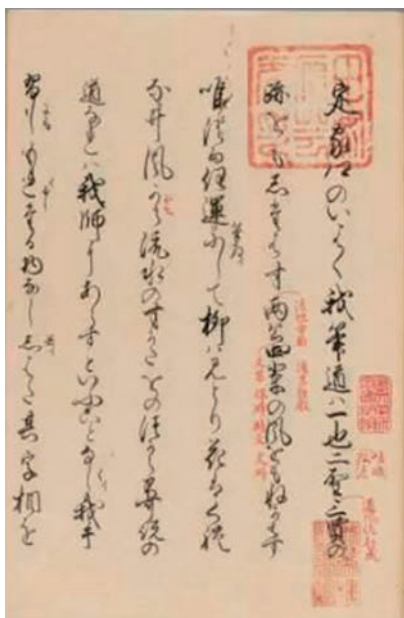
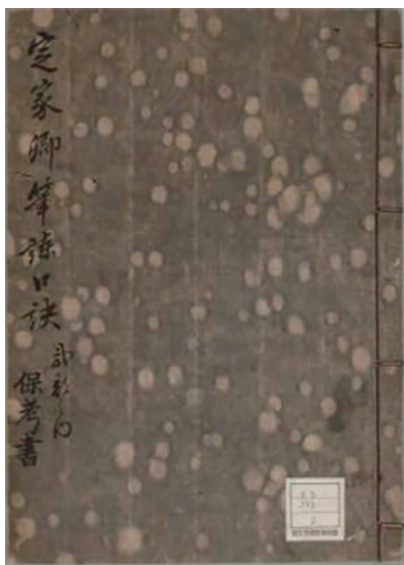
經亮

右一冊者經亮書藏写之

①と同じく入木道基本資料とされる『定家卿筆諫口訣』の内一点である。①とは筆跡が異なり、仮名表記や挿図に若干の差異が見られるが、大幅な改稿はなく記載内容は同一である。

本書は、和学者・橋本經亮（一七五九―一八〇五）による写本をもとに、同じく和学者・岡本保考（一七四九―一八一八）によって書写されたことが、奥書・識語から明らかである。①とは蒐集経緯が異なり、当時の和学者間で書

写されたうちの一冊である。近世後期の有職故実への関心の高まりと、和学者による関連資料の調査検討の流行に伴うものと考えられる。本書が田藩文庫に至った経緯については、拙稿『定家卿筆道』伝本考 付校本<sup>(4)</sup>を参照されたい。



③『定国朝臣基敦朝臣入木問答 持明院百十』（二五―七〇〇）

〔江戸後期〕写 一冊

袋綴。国文学研究資料館「国書データベース」(<https://doi.org/10.20730/200023911>)にて公開。墨・藍・朱・金色墨流文様表紙（二六・九×一九・一cm）。左肩打付書「定国朝臣基敦朝臣入木問答 持明院百十」、内題「定国朝臣基敦朝臣入木問答」。本文料紙、薄様。墨付一八丁、前遊紙一丁、後遊紙一丁。每半葉六行。用字、漢字・平仮名・片仮



名。印記「田安府芸臺印」、「献英樓圖書記」。奥書・識語なし。

持明院流伝書に含まれる一点で、松平定国の問いに持明院基敦（一七七六—一八〇七）の返答が記されたものである。①・②の『定家卿筆諫口訣』に関する記載が、本文四丁裏・五丁表に一行にわたり記される。記載された項目の釈文は、次の通りである。

一 歌合の書法三行三字より四五文字なそのみに

書来は懷紙の躰に木立乱草など三通りほと

なるをうち返し／＼書候も古賢の為

之候よし奉得其意候然うへは下案認候ても

不苦候哉または古賢のみの事は當時は仕かたく

候哉定家卿筆諫口訣は所持不仕候何にても拝

見仕候て不苦候御書物は拝見奉願候尹祥曾て

傳書を見せ不申候間少／＼つゝにても拝見

奉願

いかやうに御認被成候ても不苦候古賢にかきり候事にては

無御座候定家卿筆口訣（謙脱）一冊致進覧候御返却に及不

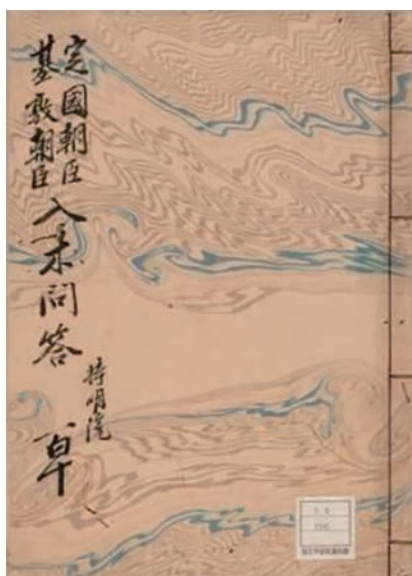
定国が『定家卿筆諫口訣』を拝見したい旨を持明院基敦へと懇願している文面である。定国は、和歌懷紙の書法か

らこの伝本に関心を寄せ、幕府の書道師範で持明院流の書家・森尹祥（一七四〇—一七九八）に拝見したい旨を伝えていた。しかし、なかなか実現しないことから、基敦に願い出ているようである。これに対し基敦の返答は、返却不要で貸し出すとのことであった。

『定家卿筆諫口訣』二冊のうち②は和学者を通しての蒐集であることから、本書の記載にある基敦から定国へと渡った本は、①の伝本であると考えられる。つまり、①の蒐集経緯は持明院流からとなる。ただし、②も同じく持明院家に伝わる伝本が基になっている可能性は高い。②の橋本経亮が同時期に持明院家所蔵資料を複数書写していたことは、一戸渉監修・慶應義塾図書館編『第三回慶應義塾図書館貴重書展示会 蒐められた古—江戸の日本学—』<sup>5)</sup>によって示されており、本文異同からも、①と②は近しい伝本であると捉えられる。

本書によると、森は定国へ『定家卿筆諫口訣』を貸すことをためらっている。理由の一つとして、森は定家様である冷泉流を快く思っていなかったことが考えられる。鈴木淳「幕府書道師範森尹祥」は、森の冷泉流に対する批判について「とくに書法上の主張に基づくものとは言えず、同藝相妬むの感を免れない」<sup>6)</sup>と指摘する。冷泉家による書法の拡がりを懸念した可能性がある。加えて、当時の持明院流と大師流との勢力争いや、これに伴い定国と弟・定信が持明院流から大師流へと傾倒していった背景もある<sup>7)</sup>。持明院流の権威を保持することに躍起になっていた森は、これらを勘案してのことであったと考えられる。

本書からは、定国が『定家卿筆諫口訣』の入手を熱望していたことが伝わる。先の①・②の伝本は、こういった定国の強い希望があり蒐集されたものと考えられる。現時点では定家様の書法について記された古典籍は、『定家卿筆道』『定家卿筆諫口訣』と称される一連の伝本のみである。田藩文庫においても同様であることから、当時であっても希少な存在であったことが窺える。

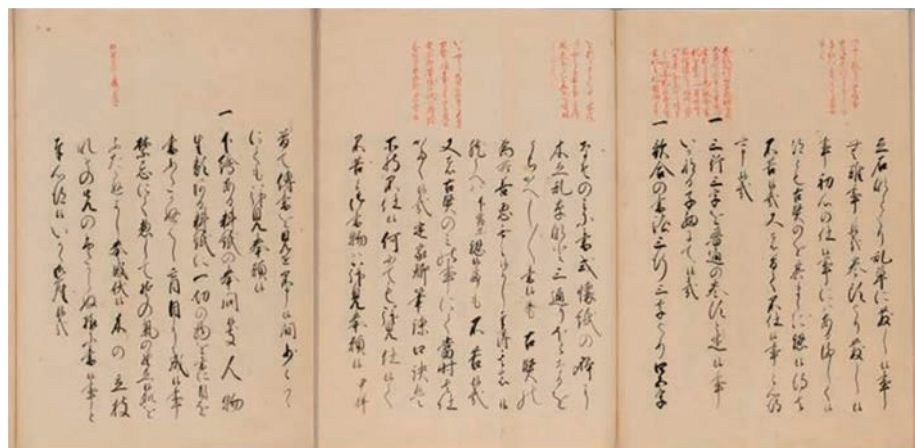
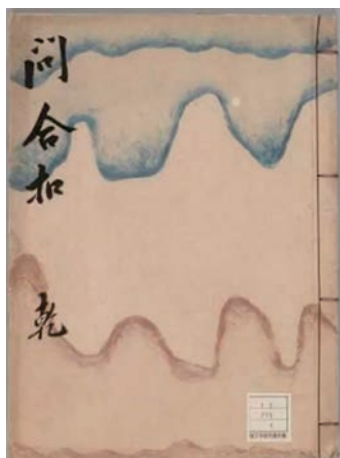


④『問合扣 乾』（一五七七五―一）

〔江戸後期〕写 一冊

袋綴。国文学研究資料館「国書データベース」(<https://doi.org/10.20730/200023590>) にて公開。白・藍・赤紫色雲紙文様表紙（二六・八×一九・六cm）。左肩打付書「問合扣 乾」、内題無。本文料紙、薄様。墨付六九丁、前遊紙一丁。每半葉九行。用字、漢字・平仮名・片仮名。朱書・濃彩絵有。印記「田安府芸台印」「献英楼図書記」。奥書は巻尾に「天保十年己亥二月廿四日 山村三秀」の記載有。

乾坤二冊の内一冊で、その他伝書に含まれる。持明院家との問答を記した手控えであったと考えられる。③『定国朝臣基敦朝臣入木問答 持明院百十』と同一の『定家卿筆諫口訣』に関する記載が、本文四丁裏から五丁裏にわたり記される。ただし、持明院家の返答である末尾二行は、上部に朱で記される。本書の奥書から、天保一〇（一八三九）年までに行われたやりとりであったことは明らかである。



⑤『入木道傳書目録』（二五―七六〇―二）

〔江戸後期〕写 一冊

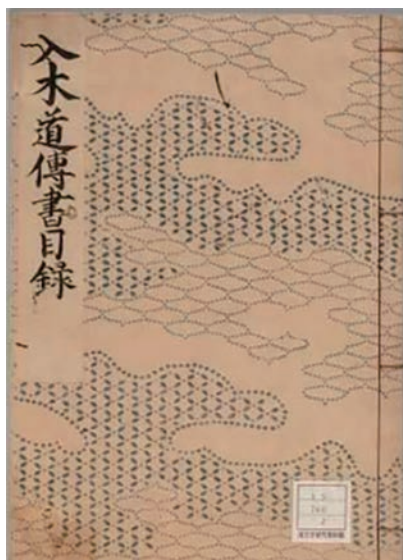
袋綴。国文学研究資料館「国書データベース」(<https://doi.org/10.20730/200023238>) にて公開。藍色七宝繋ぎ地に洲浜形表紙（二六・六×一八・九cm）。左肩無辺題箋「入木道傳書目録」、内題無。本文料紙、薄様。墨付一七丁、前遊紙一丁、後遊紙一丁。每半葉八行。用字、漢字・平仮名。印記無。奥書・識語なし。

本書は、その他伝書に含まれる田藩文庫の入木道伝書目録である。この目録では、「世尊寺家」「天ノ箱 持明院家」「世尊寺家持明院家 傳書并諸家墨蹟共」「世尊寺家持明院家 傳書并諸家墨蹟共 卷物之部」の四項目に蔵書が分類されている。この中の「世尊寺家持明院家 傳書并諸家墨蹟共」の項目である本文一五丁表に、「定家卿筆諫口訣 一冊」「同 異本 備考書 一冊」の記載がある。これは①・②を指している。つまり『定家卿筆諫口訣』は、世尊寺家・持明院家の伝書とは別に分類されていたことがわかる。

# 小括

以上五点の資料のうち、①・②は、定家様の書法について同一の内容が記された伝書である。③は、田藩文庫成立に大きく関わった松平定国が、①・②の伝書を熱望する旨が記される。その結果、①が田藩文庫本にもたらされた。④は③の控えであり、⑤は①・②が記された蔵書目録である。定家様についての記述は、この五点のみである。要するに、五点全てが『定家卿筆諫口訣』に関連する。田安德川家の蒐集において、定家様の書法について書かれた伝書は『定家卿筆諫口訣』以外は見当たらない。当伝書は、当時においても定家様書法を知る上で数少ない貴重な資料であったと考えられる。

また、定国は『定家卿筆諫口訣』を持明院流に求めると同時に、和学者經由でも入手している。入木道伝書の蒐集



が盛んに行われていたなか、定家様書法について書かれた伝書にも強い関心が持たれ、蒐集されていた当時の様子が窺える。ただし田藩文庫では、世尊寺流・持明院流伝書とは区別され保管されていた。定家様は、一般的な書法とはやや異なる認識をもって捉えられていたように思われる。

## 二、定家様の字形で記された資料

### ⑥『朝忠中納言集 世尊寺五十』（一五―七五三）

〔江戸期〕写 一冊

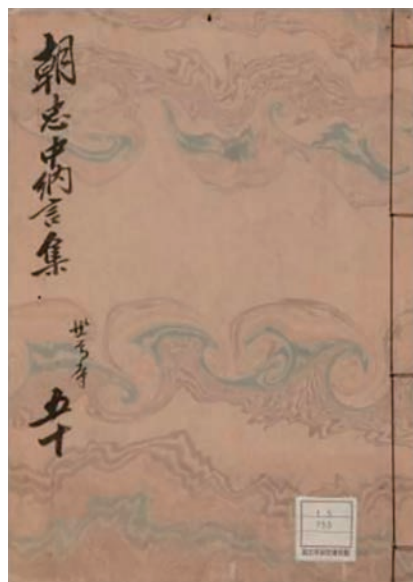
袋綴。国文学研究資料館「国書データベース」(<https://doi.org/10.20730/200023349>)にて公開。墨・藍・朱・金色墨流文様表紙（二六・七×一九・〇cm）。左肩打付書「朝忠中納言集 世尊寺五十」、内題「朝忠中納言集」。本文料紙、薄様。墨付一五丁。每半葉一〇行。用字、漢字・平仮名。印記「田安府芸臺印」、「献英樓圖書記」。奥書・識語なし。定家様に関連した資料では、唯一、世尊寺流伝書に含まれる。『朝忠宗』と称される藤原朝忠（九一〇―九六七）の家集である。本文上下は広くスペースがとられ書写されていることから、親本は枳形本であったことが窺える。書写年代は不明であるが、田藩文庫における定家様関連の資料では最も古い資料であると思われる。金子馨・海野圭介「国文学研究資料館蔵 田安德川家旧蔵 入木道伝書 解題（世尊寺家篇）」は、本文の書風について「歌仙歌集本の奥書の時代に近い書風」<sup>8)</sup>と指摘する。

本書の内題は、親本の題箋を模写したと考えられる定家様で「朝忠中納言集」と記されている。定家様で書かれているのはこの題字のみであり、本文は異なる。題箋は紙片の欠けさえも厳密に模写されていることから、定家様の題



字も親本に記された字形を再現したものと考えられる。

題箋のみ定家様で記された同例として、天理大学附属天理図書館所蔵『聞書集 西行詠』が挙げられる。これについては、「定家筆で「聞書集」と筆太に書かれており、定家の新古今撰歌の際、資料として用いられた手沢本と考えられている<sup>(9)</sup>」との見解が示される。また、冷泉家時雨亭文庫には、外題のみ定家様である多数の写本が所蔵される。これらは定家表紙本と称されるもので、外題や冒頭のみが定家の筆で、以降は側近による書写である<sup>(10)</sup>。本書は藤原朝忠の家集であることから、親本はこれらと同様の写本である可能性が高い。定家様による題箋は定家筆として認識されていたことから、本書のように厳密に書写されたと考えられる。



⑦『色紙形 持明院 二 九十下』（一五―六八二―二）

〔江戸後期〕写 一冊

袋綴。国文学研究資料館「国書データベース」(<https://doi.org/10.20730/200023892>)にて公開。藍色無紋表紙（二六・九×一九・一cm）。左肩紫打雲題箋「色紙形 持明院 二 九十下」、内題「色紙形 二」。本文料紙、薄様。墨付二一丁、前遊紙一丁。用字、漢字・平仮名。印記「田安府芸臺印」、「献英樓圖書記」。奥書・識語なし。

持明院流伝書に含まれる雛形で、「色紙形」写本二冊のうちの一冊。他一冊も同一の表紙・題箋で、外題「色紙形 持明院 一 九十上」・内題「色紙形 一」と記される。「色紙形 一」は五方和歌・四隅和歌・五行和歌・五色和歌・五常和歌、「色紙形 二」は五味和歌・六根和歌・詞書六歌仙・三夕和歌の合写。各歌が色紙形をとり写され、色紙右上には筆者名が添えられる。金子馨・海野圭介「国文学研究資料館蔵 田安德川家旧蔵 入木道伝書 解題（持明院家篇）」は「元は寄り合い書きされた色紙であったことが予想される」<sup>〔1〕</sup>との見解を示す。

このうち「色紙形 二」の五味和歌、六根和歌、詞書六歌仙に、冷泉為村（一七一二―一七七四）による定家様の色紙三点が写されている。近世中期の公卿歌人・冷泉為村は上冷泉家中興の祖と評され、一時中断した定家流を冷泉流として復活させた<sup>〔2〕</sup>人物である。その書はやや造形的要素を含むものの定家様であることは明らかである。全国に多くの門弟を抱えていたことから、遺墨も多く確認される。

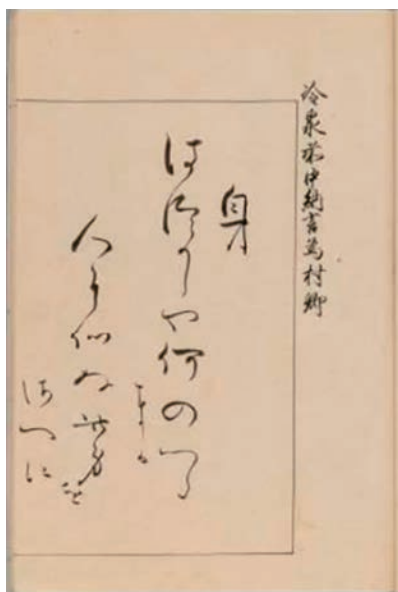
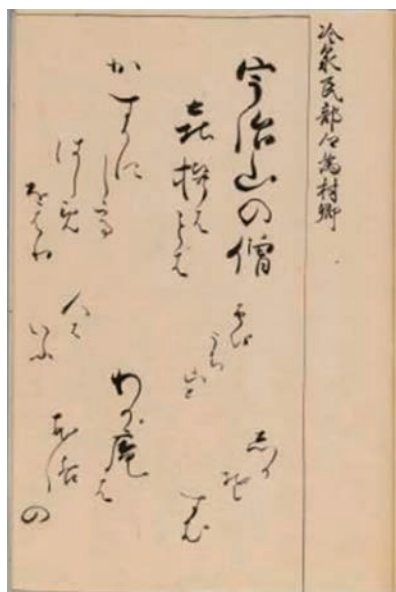
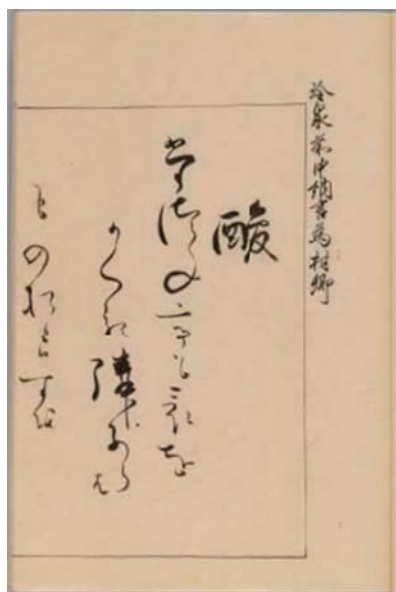
名児耶明「定家様を築いた人々」が「かぎりなく定家様に近づく書は父為久の例でもわかるように意味がなかった。新しい定家様を探り出さなければならなかった」<sup>〔3〕</sup>と指摘するように、為村の定家様は、あえて定家の筆跡に自己表現を加えたものであったと考える。これには、父・為久があまりにも定家と似た筆跡を書いたため、霊元天皇からその筆意を改めさせられたことと関係する。その際に中断した定家流を冷泉流として復活させたのが為村であったことか

ら、定家筆跡の忠実な再現とは異なる定家様が必要なはずであった。

加えて、為村の定家様には近世期における定家様を取り巻く文化的背景も関係すると考える。本書で見られるような色紙以外に、為村は懷紙の和歌末尾を茶道具の花生に記すなど、茶の湯に関連した作品も残している<sup>〔14〕</sup>。為村の時代の冷泉家では、定家様・和歌・茶の湯が結びついていたことがわかる。このような作品における定家様とは、必ずしも定家の筆跡をそのままに再現することではなく、自己表現が多かれ少なかれ含まれたものであったと思われる。

また、本書は近世中期の公家によって記されたものであるが、為村の色紙は、同時代の他の公家の筆跡と比較すると、変化に富んだ散らし書きの構図となっている。特に詞書六歌仙については顕著である。本書に見られる字形や変化に富んだ散らし書きからは、これまでとは異なる造形的要素を含んだ新しい定家様の享受の姿が見られる。

ちなみに本書には、定家の子・藤原為家（一一九八―一二七五）による色紙の写しも含まれている。冷泉民部卿宗家卿として「色紙形 一」五行和歌・五色和歌に色紙二点が記載される。共に定家様では書かれていない。為家による定家様の遺墨はこれまでに見られず、本書においても同様である。為家は中世初期の人物であり、為村は田藩文庫の入木道伝書が蒐集された時期と同年代の人物であることから、「色紙形」は新旧の色紙が混合した写本であると言える。



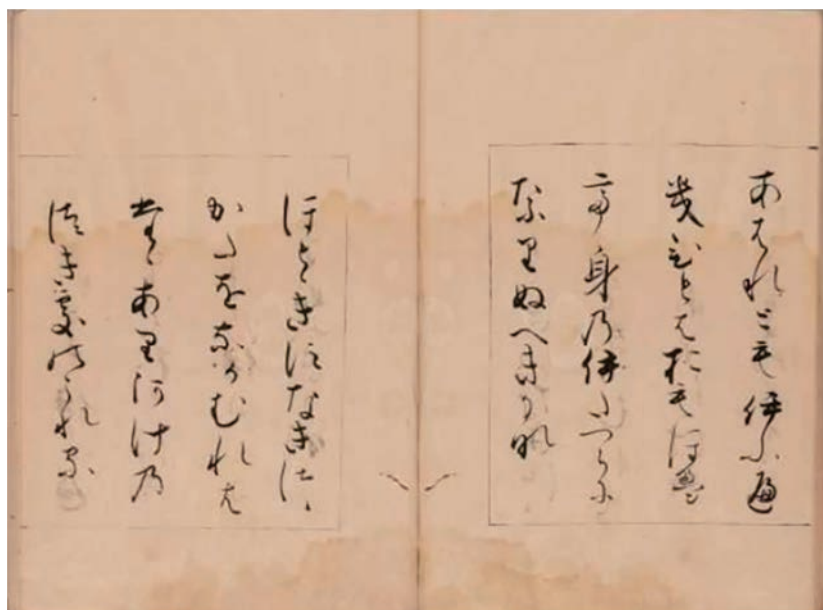
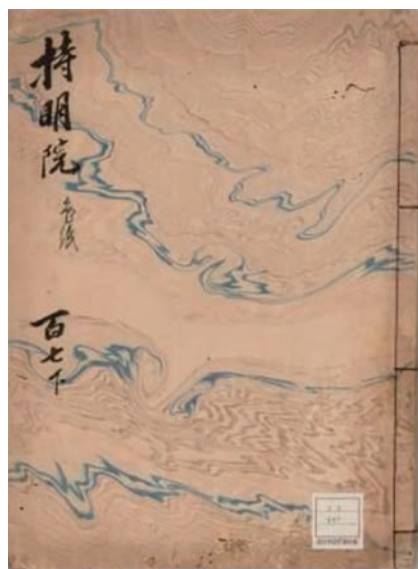
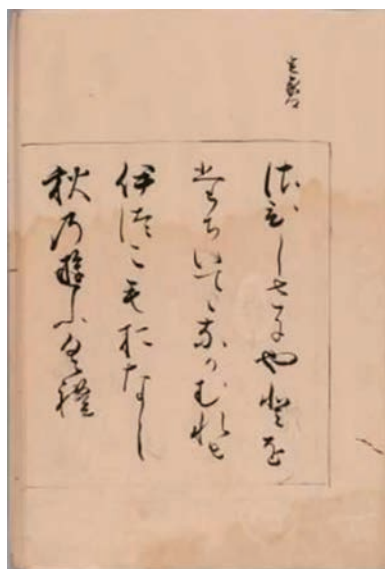
⑧『持明院色紙 持明院百七下』（一五―六九七）

〔江戸後期〕写 一冊

袋綴。国文学研究資料館「国書データベース」(<https://doi.org/10.20730/200023907>) にて公開。墨・藍・朱・金色墨流文様表紙（三〇・五×二二・三cm）。左肩打付書「持明院色紙 持明院百七下」、内題「持明院 百七下」。本文料紙、薄様。墨付五四丁。用字、漢字・平仮名。印記「田安府芸臺印」、「猷英樓圖書記」。奥書・識語は巻尾に「右一卷 尔松山少将君奉傳之畢 寛政七年十二月 日 尹祥」の記載あり<sup>15)</sup>。

持明院流伝書に含まれる雛形の一冊で、「三光院御筆時代不同歌合」「新六家撰花」「西湖八景」「十體」「釈阿九十賀」「紀伊国吹上」「古代之色紙」の合写。各歌が色紙形をとり写され、色紙右上には筆者名が添えられる。

このうち「古代之色紙」に、定家卿筆として三首が記され、定家様の特徴が若干窺える。しかし、字形は定家様というよりも通常の行書体に近い。放ち書きであることと、他の色紙と比べて線に若干の太さを持たせることで、定家様を模しているようである。この字形からは、連綿が少ないことと、太さを持つ筆線であることが、定家様の特徴として捉えられていたことがわかる。



⑨『三十六人歌合 持明院百十四』（一五七〇四）

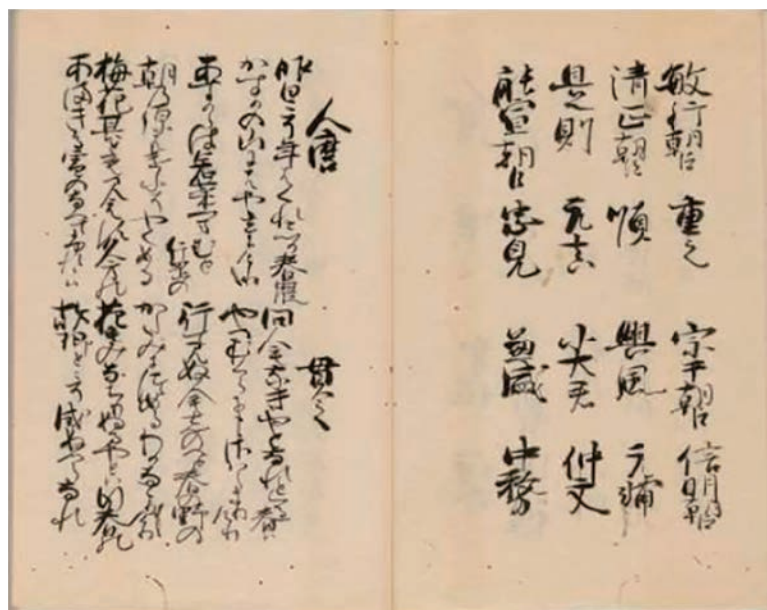
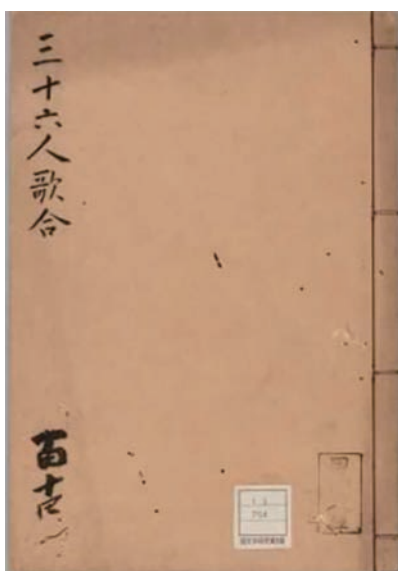
〔江戸後期〕写 一冊

袋綴。国文学研究資料館「国書データベース」(<https://doi.org/10.20730/200023235>) にて公開。白茶色無文表紙（二六・四×一八・〇cm）。左肩打付書「三十六人歌合 持明院百十四」、内題「三十六人歌合」。本文料紙、薄様。墨付一八丁。用字、漢字・平仮名。印記「田藩文庫」、「田安府芸臺印」、「献英樓圖書記」。奥書・識語は巻尾に「採択員数雖迷是非 已被定其所来遠 年不書留一本哉先年 所持引失了仍令書写 不及校」の記載あり。

持明院流伝書に含まれる雛形の一冊。「三十六人歌合」の草子の写しであり、本文全てが定家様で記されている。田藩文庫所蔵の入木道書では、全てが定家様で記された唯一の写本である。定家様を書き慣れた人物によるものと思われ、非常に流暢な筆の運びで書かれている。しかし、拡大すると補筆の形跡が見られる。補筆の箇所は太い線の部分に限られていることから、太さが足りないと感じて後から加えたものであろう。先述の⑧『持明院色紙 持明院百七下』と同様に、定家様らしさを表現するにあたり太い筆線が重視されていたことがわかる。

そして、他の写本では見られない濃墨が使用されている。同様の定家様の写本は散見されることから、濃墨は定家様の特徴として捉えられていたと考えられる。







⑩『古歌散形 持明院百十五』（一五―七〇五）

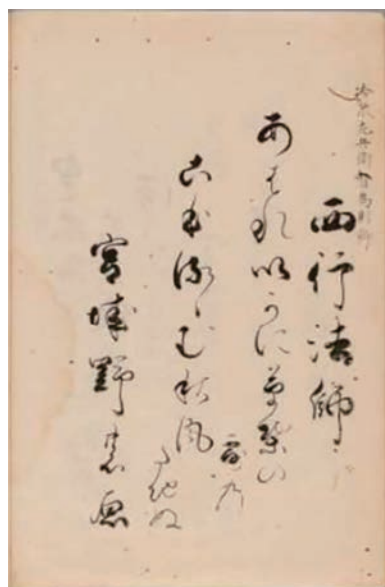
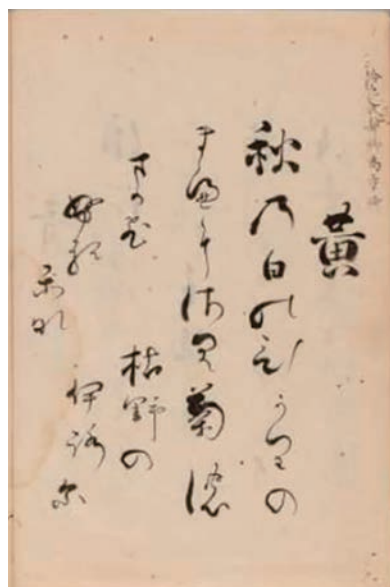
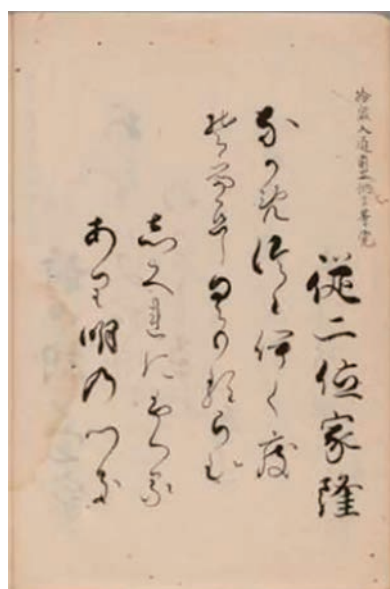
〔江戸後期〕写 一冊

袋綴。国文学研究資料館「国書データベース」(<https://doi.org/10.20730/200023837>)にて公開。茶色無文表紙（二八・八×二〇・二cm）。左肩双郭題箋「古歌散形 持明院百十五」、右方打付書「古歌散形」、内題「手鏡写」。本文料紙、楮紙。墨付一二丁。用字、漢字・平仮名。印記「田藩文庫」。奥書・識語なし。

持明院流伝書に含まれる雛形の一冊。色紙に書かれたと考えられる歌・二三首が写され、右上に筆者名が添えられる。うち三首が定家様で記されている。順に冷泉為泰（一七三六―一八一六）、冷泉為則（一七七七―一八四八）、冷泉為章（一七五二―一八二二）によるものである。

為泰・為章・為則は上冷泉家の三代にわたる当主である。為泰は為村の子で、上冷泉家一六代当主。為章は為泰の子で一七代当主。為則は為章の子で一八代当主。この三人は、非常に似通った定家様を書く。彼らの書風については「リズミカルな絵画的要素のみえる晩年の為村の筆法を受け為泰、為章、為則とほぼ同じ筆致がつづく」<sup>16</sup>と言われる。実際にここでの筆跡も非常に似通った字形である。本書での上冷泉家の三代の筆跡は、近世後期の上冷泉家における定家様継承の様相を呈している。

ちなみに本書には、下冷泉家の冷泉為訓（一七三八―一七八二）の色紙も含まれているが、定家様ではない。為訓は為泰と同時代の人物であり、下冷泉家一四代当主にあたる。この時代に定家様は冷泉流と称されているが、上冷泉家に限られていたことが示される。



⑪『源氏物語月次屏風詞書』（一五―四三二）

〔江戸後期〕写 一冊

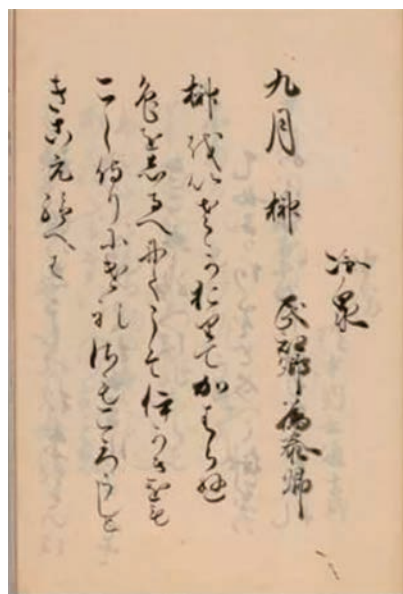
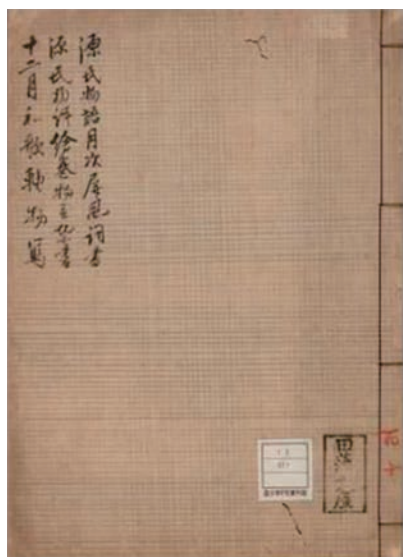
袋綴。国文学研究資料館「国書データベース」(<https://doi.org/10.20730/200023596>)にて公開。茶色地藍色格子文様表紙（二七・〇×一九・三cm）。左肩打付書「源氏物語月次屏風詞書 源氏物語繪巻物言葉書 十二月和歌軸物寫」、内題「源氏物語月次屏風言葉書 公卿寄合書 拾式枚 板谷」。「源氏物語繪巻物言葉書」「十二月和歌軸物寫」と合写。本文料紙、薄様。墨付一二丁。用字、漢字・平仮名。印記「田藩文庫」。奥書・識語なし。

その他伝書のうちの一冊で、「源氏物語繪巻物言葉書」「十二月和歌軸物寫」と合写される。公家一二名による寄合書で、屏風の詞書部分の写しであると考えられる。内容は、陽明文庫所蔵『源氏物語月次詞書』『源氏物語月次詞書朗詠』と同一である。もとは既に定型化された詞書を各月異なる公家が記し、屏風に仕立てたものであろう。画絵と詞書の両方からなる屏風のうち、詞書部分が写された可能性もある。例えば、同時代作品である東京国立博物館所蔵「源氏物語屏風」（A―一六六）<sup>⑪</sup>のように、公家が記した色紙と絵師による絵画を屏風に貼り付けた仕立ての屏風である。

本書の筆跡は、全般的に定家様を模したような放ち書きで写されているが、定家様とまでは言えない。だが本書の字形は合写の他二点とは明らかに異なり、字形に不自然さを感じさせる。この不自然さは、定家様に近い字形を、定家様に習熟していない書写者が模したことにより生じたものと思われる。また、「九月」の為泰の名については定家様の特徴が比較的顕著である。定家様の特徴をより定型化した為泰の書風は印象的であり、書写者は為泰が定家様の書き手であることを強く認識していたのかもしれない。

# 小括

以上六点は、世尊寺流伝書の題箋が一点、持明院流伝書の雛形が四点、その他雛形が一点であった。その全てが和歌と関連があり、色紙形は三点を占める。書き手については、定家とするものは⑥・⑧、歴代冷泉家当主は⑦・⑩・⑪であった。従って、定家様で書かれたものは、定家とその子孫・冷泉家による色紙を主とした和歌に集約されている。これは入木道における定家様の様相を呈している。入木道においては、定家由来の和歌ゆえの定家様なのである。書き手として名が挙げられている人物は、定家・為村・為泰・為章・為則の五名である。これまでも為村以降の冷泉家四代による定家様の筆跡は多く確認されており、調査結果も同様であった。対して、下冷泉家による定家様は



見られず、上冷泉家に限られたものであると言える。この為村以降の上冷泉家による「冷泉流」は、近世期における定家様受容の一形態として位置付けられる。

本稿であげた資料は、定家様以外の歌は行書体で記されている。その行書体の字形は、歌の筆者が異なっても、さほど書き分けは行われていない。定家様は他の字形に比べ個性が強く、差異化しやすいという点は考慮すべきであるが、伝書に記載される字形のなかで、定家様のみが特殊な字形として捉えられている印象は強い。おそらくこれが当時の人々の定家様に対する認識であったと思われる。また、⑧・⑨は、連綿をなくすこと、線を太くすること、濃墨を使用することで、定家様を再現しようとする姿勢が見える。当時の定家様書法の捉え方が窺われる資料である。

## おわりに

本稿での資料調査は、近世期における定家様の受容について、従来からの説を裏付ける結果となった。まず、和歌との強い結びつきである。定家様で記されたものは全て和歌に関連しており、『定家卿筆筆諫口訣』を求めたのも和歌への関心からであった。さらに、定家所持を意味する定家様の厳密な模写による題箋や、不慣れた定家様で書写された定家の和歌懐紙からは、当時の定家崇拜の姿が垣間見られる。

そして、為村、為泰、為章・為則の定家様による筆跡は、和歌の家・上冷泉家による冷泉流としての定家様の継承を示している。ただし、写しが残されているのは近世後期の人物のみであり、中世の冷泉家による定家様の写しは残されていない。少なくとも、冷泉為和（一四八六―一五四九）・為満（一五五九―一六一九）・為頼（一五九二―一六二七）は、定家様の書き手であったことは遺墨から明らかであるが、本調査では見られなかった。為村は、冷泉家のな

かで一時中断した定家流を冷泉流として復活させており<sup>(18)</sup>、為村以降の冷泉家では定家様が継承されていく。ここに見られる為村以降四代あたりが、おそらく冷泉家の定家様が冷泉流として周知された頃と考えられる。

田藩文庫の入木道伝書が蒐集された時代は、定家による和歌懷紙は羨望の的であった。しかし、定家様の書法が入木道として一般的なではなかったことを、この調査結果は示している。まず、これらの定家様に関する資料は、入木道伝書全一九六点中、わずか一点である。しかも①・②・⑨以外は、部分的な記載に過ぎない。加えて、⑨以外の筆跡は総じて定家様に不慣れな人物による感があり、定家様書法に関する伝書も『定家卿筆筆諫口訣』のみである。手本として必要な雛形が少なく、書法に関する伝書も一種であることから、実用としては物足りなさを感じる。よって定家様書法を習得することは、やや特殊なことであったと捉えられる。

定家様書法の習得は、隸書体に近い位置付けであったと考えられる。隸書体は、近世では版本の題字や扁額に頻繁に用いられている書体である。近世初期では、日常の場ではなく、特定の場で用いられる装飾性の強い書体として意識されていた<sup>(19)</sup>。ゆえに隸書体に関する記載は、田藩文庫の入木道伝書では稀である。定家様についても、字形そのものが定家という特別な意味を孕んでいることに意義があり、隸書体と同じく明瞭で印象的な字形である。両者のもつ性質からは、一般的に習得すべき入木道とは異なる位置付けが成されていたと考えられる。

田藩文庫の入木道伝書は、和歌の書記法に関するものがとりわけ多く、定家様に関する資料も同様であった。和歌と入木道が密接な関係であることは明らかである。資料が示すように、為村以降の冷泉家が定家様の拡がりに果たした影響も大きい。定家や定家にまつわる和歌を具象化したものとして、定家様が高い価値を持つことへの一端を担った。しかし、田藩文庫の入木道伝書全体から定家様を俯瞰的に見ると、和歌を記す書法として、定家様が現実的に必要とされていたとは言い難い。和歌享受者にとって、自ら和歌に用いる書風という意識は概ね希薄であったと考える。

近世期における定家様書法の拡がりを考えるにあたっては、本稿での調査結果からも、和歌活動以外の要因を視野に入れるべきであろう。

〔注〕

- （１）鈴木淳「田藩文庫考」（国文学研究資料館編『田藩文庫目録と研究』日本書誌学大系九四、青裳堂書店、二〇〇六年）四五六―四六〇頁。本稿での分類もこれに従う。

（２）以下の資料参照。

・新井栄蔵『「書」の秘伝―入木道の古典を読む―』（平凡社、一九九四年）

・国文学研究資料館編『田藩文庫目録と研究』日本書誌学大系九四（青裳堂書店、二〇〇六年）

・金子馨・海野圭介「国文学研究資料館蔵 田安德川家旧蔵 入木道伝書 解題（世尊寺家篇）」（『国文学研究資料館調査報告』、人間文化研究機構国文学研究資料館、二〇一八年三月）

・金子馨・海野圭介「国文学研究資料館蔵 田安德川家旧蔵 入木道伝書 解題（持明院家篇）」（『国文学研究資料館調査報告』、人間文化研究機構国文学研究資料館、二〇二〇年三月）。

- （３）拙稿『「定家卿筆道」の著述内容とその意義』（『総研大文化科学研究 第二〇号』総合研究大学院大学、二〇二四年三月）。

- （４）拙稿『「定家卿筆道」伝本考 付校本』（『総研大文化科学研究 第一九号』総合研究大学院大学、二〇二三年三月）一九・二〇頁。

- （５）一戸渉監修・慶應義塾図書館編『第三三回慶應義塾図書館貴重書展示会 蒐められた古―江戸の日本学―』（慶

應義塾図書館、二〇二一年）三九頁。

(6) 鈴木淳「幕府書道師範森尹祥」(『書誌学月報 第四〇號』青裳堂書店、一九八九年三月) 一〇・一一頁。

(7) 一戸渉「書道大師流と近世朝廷」(『文化史のなかの光格天皇——朝儀復興を支えた文芸ネットワーク』勉誠出版、二〇一八年) 参照。

(8) 金子馨・海野圭介「国文学研究資料館蔵 田安德川家旧蔵 入木道伝書 解題 (世尊寺家篇)」(『国文学研究資料館調査研究報告』、人間文化研究機構国文学研究資料館、二〇一八・三) 一六五頁。

(9) 天理大学附属天理図書館「天理図書館開館七十二周年記念 和歌の時代 古今集そして新古今集」(天理大学、二〇〇二年) 二五頁。

(10) 冷泉家時雨亭文庫編『冷泉家時雨亭叢書完結記念 朝日新聞創刊一三〇周年記念 冷泉家 王朝の和歌守展』(朝日新聞社、二〇〇九年) 参照。

(11) 金子馨・海野圭介「国文学研究資料館蔵 田安德川家旧蔵 入木道伝書 解題 (持明院家篇)」(『国文学研究資料館調査研究報告』、人間文化研究機構国文学研究資料館、二〇二〇・三) 一三〇頁。

(12) 名児耶明「定家流を築いた人々」(五島美術館『五島美術館「特別展「定家様」」、五島美術館、一九八七年) 一四七頁。

(13) 前掲注12、一四六、一四七頁。

(14) 五島美術館『五島美術館「特別展「定家様」」(五島美術館、一九八七年) 一八七頁。

(15) 「月」と「日」の間に二文字分のスペースが空けられている。おそらく後から日にちを記入する予定であったと思われる、奥書きを記した際の状況が窺える。



- (16) 前掲注12に同じ。
- (17) 国立文化財機構所蔵品統合検索システム「ColBase」  
([https://colbase.nich.go.jp/collection\\_items/mm/A-1166](https://colbase.nich.go.jp/collection_items/mm/A-1166)) 参照。
- (18) 前掲注14に同じ。
- (19) 川畑薫「東京国立博物館蔵・藤田乗因筆「六六武将賛」について——松花堂流の志向した「書き分け」をめぐる考察——」（『MUSEUM第59号』東京国立博物館、二〇〇五年）参照。

